

聖木曜日・主の晩さん

2011.4.21

出エジプト 12・1-8,11-14

1 コリント 11・23-26

ヨハネ 13・1-15

今晚私たちはここに集って、聖木曜日の主の晩さんの夕べのミサをささげています。大きなショックに打ちのめされ、暗く、重苦しい雰囲気の中に迎えた新年度、依然として先行きの見えないまま、日にちだけが過ぎてゆきます。そんな平日の仕事帰りの夕べ、私たちは教会に足を向けて、こうして今年も迎えた、過ぎ越しの聖なる三日間を祝おうとしています。

今晚祝おうとしている、主の晩さんのミサは、言うまでもなく主イエスが弟子たちとともにした最後の晩餐を記念するものです。けれども、その最後の晩餐は、単に、イエスと弟子たちがともにした最後の晩餐という意味で重要であるだけではありません。イエスと弟子たちがともにしたあの晩さんは、ユダヤの人々が、旧約の時代から祝って来た過ぎ越しの祭りの中心をなす聖なる晩さんであったと福音書は報告しています。今晚私たちが祝っている主の晩さんの夕べのミサには、その背後に、旧約聖書に遡る長い歴史があるのです。

ユダヤの人々が祝って来た過ぎ越しの祭りは、第一朗読で聞いた旧約の出エジプト記に語られている出来事を記念する祭りです。ユダヤの人々にとっては、それは、彼らの祖先たちがエジプトの地から逃れる際に体験した、神の愛による、圧倒的な救いの出来事を記念する祭りです。年毎にその祭りを祝うたびに、ユダヤの人々は、自分たちに与えられた神の大いなる救いのみわざを思い起こし、神の救いに与った神の民としての自分たちのアイデンティティーを確かめ合ってきたのです。ユダヤの人々にとって、それは最も晴れがましい祭りであるはずですが、けれども、その祭りの中心である記念の晩さんは、今に至るまで、第一朗読で聞いたとおりの、出エジプトの記憶から離れることのない質素な形を留め続けています。バビロン捕囚以降のユダヤの人々がたどって来た歴史は、繰り返されるその時々の世界帝国の支配の下での忍従と、祖国を失った流浪の民としての異国の地での厳しい被差別の歴史です。その歴史の中でユダヤの人々は、年ごとに、過ぎ越しの祭りを祝い続けてきたのです。イエスの時代のユダヤも、ローマ帝国とヘロデ王家の、外国支配の下で自分たちの民族のアイデンティティーの拠りどころとしての、過ぎ越しの祭りを祝い続けていたのです。私たちが今晚祝う主の過ぎ越しの晩さんのミサはそのような歴史を背負っています。圧倒的な外の世界の脅威に曝されながら、神によってもたらされた救いの出来事を記念する祭りを祝い続けてきた人々。この祭りを祝うことに

よって、神による救いを信じる信仰を抛りどころとする、神を信じる民としての歴史を生きてきた人々の歴史に私たちも連なっているのです。

けれども、今晚私たちが祝う主の晩さんのミサは、ユダヤの人々が祝って来た、出エジプトの神の救いのみわぎを記念する過ぎ越しの晩さんではありません。私たちが祝うのは、主イエス・キリストの十字架の死と復活によってもたらされた、新しい過ぎ越しの記念の祭りです。ユダヤの人々が年毎に、この季節に過ぎ越しの祭りを祝ってきたように、私たちも毎年この季節に、主の過ぎ越し、すなわち、主イエス・キリストの十字架の死と復活によって、新たに私たちにもたらされた神の救いのみわぎを記念するのです。出エジプトに由来する過ぎ越しの祭りが、過酷な歴史を生きてきたユダヤの人々の信仰の抛りどころとなってきたように、私たちが祝うこの主の過ぎ越しの祭りが、この時代を生きる私たちの心の抛りどころとなることを願いたいと思います。

聖木曜日の主の晩さんの夕べのミサで朗読されるヨハネ福音書には、不思議なことに、肝心の聖体制定の場面が語られず、その代わりにイエスが弟子たちの足を洗われたことが記されています。これはどういうことなのでしょう。ヨハネ福音書の記者が、最後の晩餐における聖体の制定を知らなかったわけではありません。私たちが今もミサの中の度ごとにいただくキリストの聖体は、第二朗読のコリントの教会への手紙が証言しているように、最後の晩餐の主の言葉に基づく、私たちの信仰の中心です。ミサの度ごとにいただく聖体のパンは、私たちのために十字架の上にささげられた主のいのちそのものです。「取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしの体である。」との最後の晩餐の主の言葉に基づいて、私たちはミサの度ごとに、聖体のパンを、私たちのために十字架につけられて与えつくされた主のいのちのからだとしてこの身にいただいているのです。聖体をいただくことによって、私たちは十字架につけられて死に、復活されたイエスのいのちをこの身にいただいているのです。

ヨハネ福音書が大切な聖体制定の場面を、あえて記さなかったのは、私たちがミサのたびにいただいている聖体が、この過ぎ越しの聖なる三日間に記念され祝われることの全てを示し、与えるものであることを、大胆な省略によって強調するためです。何故あえてそうする必要があったかと言えば、私たちはミサにも聖体拝領にも、普段の生活の全てがそうであるように、慣れっこになってしまっているからです。主がそのいのちを賭けて私たちにもたらしてくださった、救いのみわぎを前にしても、私たちの足は、この世の生活の中を歩き回ったままの足です。だから、イエスはこの聖なる過ぎ越しの祭りを前に、弟子たちの、そして、私たちの足を洗い清めてくださろうとなさっているのです。

私たちはこの過ぎ越しの聖なる三日間の典礼を通して、私たちに与えられて

いる、主イエス・キリストによる神の大いなる救いのみわざを記念し、祝うのです。聖体を通して私たちに注ぎ込まれる主のいのちと結ばれていることを喜び祝うのです。ヨハネ福音書は最後の晩餐の中で、聖体の秘跡を暗示する、イエスの印象的なことばを伝えています。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」だから、わたしに留まりなさい。そうすれば、あなたがたはそのいのちの樹液によって、津波の被害にめげずに芽吹いた木々のように、あらゆる難局を乗り越えるいのちの力を与えられると主は呼びかけておられるのです。私たちの疲れた心が開かれ、この呼びかけに応えることを求めて、弟子たちの前にかがみこんで彼らの足を洗ってくださる主の、必死の愛の招きを感じつつ、この主の過ぎ越しの夕べのミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高